

本当の教えに出遇うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第64号

発行:2018年10月25日
発行者:淨土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
〒739-0147 副住職 天野英昭
東広島市八本松西6丁目10番1号
TEL・FAX 082-428-1360

報恩講並びに秋季永代経法座

親鸞聖人のお法りを喜ばせていただきましょう

日 時 11月16日（金） 9:00～15:00頃

ご講師 朝枝 暁範師（北広島町 本立寺住職）

朝席 9:00～11:30

お斎（お食事）
とき 地元で取れた季節のお野菜を使って、地域の皆様が精進料理を用意
してくださいます。新しくなった庫裡でお召し上がりください。

昼席 13:00～15:00

第85回歎異抄輪読会

日 時 11月22日（木） 19:00～20:30頃

ご講師 松田正典先生（広島大学名誉教授）

費 用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です。

お知らせ

★天龍寺仏教壯年会 月例会

10月31日（水）19:00～20:30

★天龍寺仏教壯年会の方々へ感謝申し上げます。

先般、磯松天龍寺墓苑の倉庫設置並びに裏山の草刈りにご尽力を天龍寺仏教壯年会のみなさまにいただきました。書面をお借し厚く感謝申し上げます。

還暦を過ぎしみじみ感じる事です。（Ⅰ）

私事で恐縮ではあります、先般血液検査をし結果が出て動搖したことです。それはある器官の数値が正常値の二倍あり、また白血球の数が増大していたことあります。

当山に帰り少し考えますに、生きていくことに執着しなければ、この様な動搖も起こらないのかとも考えた事あります。ある意味何処までも生きていきたいというのが、正直な思いであり、その事自体がこの世に生を受けた者の本能だとも考へる事もあります。

その例えとして、先般庭の草を取り、ぽいと投げてそのままにしておりました。数日たったある日、何気なくその投げていた草を見ますとその投げられた場所で必死に生きようとしておりました。

その光景を見て、あらためて今申しましたようにこの世に生を受けた植物・動物に限らず、すべての生き物は何処までも生きて行こうとするものだと実感したことあります。

人が求める地位・名譽・財産にせよ、身近な所では、明日食べていけるのだろうか。人によく思われたい。人から好かれたい等、常に周りに気を配りながら、一方でその様な事で息苦しさを感じながら生きていくことも含め、突き詰めて考えれば重ねて申しますが、生に対する執着がなければ、

日々様々な物に囚われ、苦惱することもないのかとも考えたことでもあります。

10代、20代の頃、還暦を過ぎるころには、良い意味で自分自身は枯れてきているのかとも想像したことがあります。しかしながら、還暦を過ぎましても全く枯れもせず、10代、20代と同様に日々苦惱の人生を歩んでいる自分であり、その様な自分を鑑み思いますに、今申しましたように煩惱の多くは生きていきたい・生きねばならない等という所に起因しているが故に、あらためて自らの婆娑の人生が終わるまで苦惱の人生を歩いて行く存在であると再認識している所であります。

一方で、勤務していました学校を早期退職させていただき早いもので9年が過ぎました。この9年間の間に多くの悲しいご縁、すなわちお葬儀のご縁をいただきました。一番若い方は7歳でした。また一番ご高齢の方は102歳でした。

理不尽な言い方になりますれば、お許しをいただければありがたいと存じますが、ある方が、以前『生きたいと思ってもこの世にご縁がないれば、この世を去らなくてはならず。お迎えが来て欲しいと願っても、この世にご縁があれば日々苦惱しながら生きていかなくてはならない。ある意味これが人生と言えば人生なのかもしれない』と言われた事がありますが、近頃そのお言葉を思い出すことがあります。

さらに話は展開しますが、私たちは健康・家族・財産等を抛り所にしながら、日々不安・恐怖等を抱えながら生きております。では何故に不安・恐怖等を抱えながら生きていかなくてはならないのでしょうか。それはその様な物はいとも簡単に崩れ去っていくことを、自らの少ない経験を通して知性と申しましょうか頭の中で理解をしているからだと思う事です。

しかしその様に理解等をしておりながら健康・家族・財産等を抛り所にし、生きていかざるおえない人間としての哀しさを高飛車ながら感じることもあります。

（次号に続きます。）